

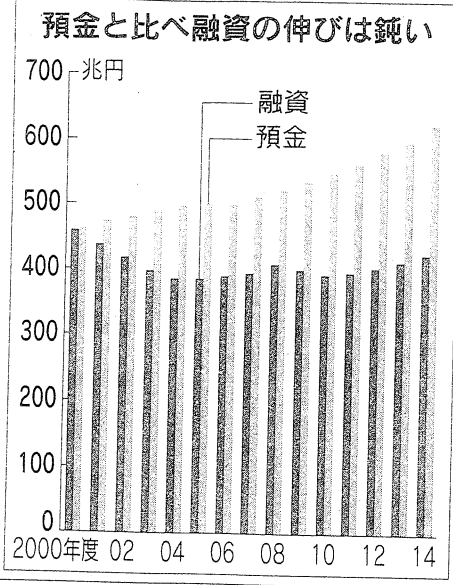
銀行、カネ余り一段と

預金・融資の差 12兆円拡大

1年で

銀行のカネ余りが一段と鮮明になってきた。日銀が10日発表した3月の貸出・預金動向で、融資と預金の差が1年で12兆円(6.6%)広がり、過去最大の198兆円と

なった。融資の伸びは6年ぶりの大きさととなったが、預金が融資より大幅に増加した。預金は前年同月比3.9%増の622兆円となった。「老後の不安などから、高齢者が受け取る年金が貯蓄に回っている」(みずほ証券の上野泰也チーフマーケットエコノミスト)という。日経平均株価が一時、2万円を上回るなど株価の上昇は続いているが、資金を積極的に運用しようとする動きは限られている。融資は同2.7%増の424兆円。低金利で個人や企業にとっては借入れを増やしやす環境になった。ただ、経済の回復は依然として緩やかで、預金の伸びと比べれば見劣りする。



銀行の今年2月時点の国債保有額は124兆円で過去2年で39兆円減った。代わりに増えているのは銀行が日銀に預ける日銀当座預金で、2月時点の残高は112兆円と銀行の国債保有額に迫る。日銀当座預金の利息は年0.1%で、現在の新発5年物国債利回り(0.095%)より高い。より大きい利ざやを求め、体力のあるメガバンクは海外に積極進出している。経済成長余地の大きい東南アジアなどの資金需要を取り込みたい考えだ。一方で、地銀はより金利の高い外債などの運用に資金をシフトしている。